

研究テーマ

回復期リハビリテーション病棟看護師のやりがいの実態
～ワーク・モチベーション尺度を用いた調査～

病 院 名

医療法人社団健育会 竹川病院

演 者

○梶原志保(看護師) ^{かじわらしほ} 長田彩伽(看護師) 衛藤愛(看護師)

概 要

【研究背景】

回復期リハビリテーション病棟（以下、回リハ）看護師からは「やりがい」が得られない」というネガティブな発言が聞かれる。自分のやりたい看護を期待して回リハを選択してきたにも関わらず、やりがいを感じないまま働いている可能性が考えられた。

【研究目的】

回リハで働く看護師は、必要な知識を持ちやりがいを感じて看護を実践できているのか。感じていないとすればその要因は何かを明らかにする。

【研究方法】

研究対象：A病院の回リハで3か月以上勤務する看護師・准看護師31名 調査方法：質問紙調査法 研究期間：2020年9月 調査内容：やりがいに影響があると考えられる看護実践内容、教育に関するニーズなどの独自の項目と、ワーク・モチベーション測定尺度（12項目）倫理的配慮：A病院倫理委員会で承認を得た上で対象者へ配布し、提出をもって同意とした。

【結果】

入職前後で回リハのイメージとの相違があったと71%が答えている。ワーク・モチベーション尺度では、「確実にリスクを回避すること」の関心が高かった。また、4因子のうち

【キャリア向上への関心】が他の項目よりも低く有意差があった。【チーム協調への関心】は、「セラピストから移乗や経口摂取方法等日常生活に必要な技術を積極的に学んでいる」の相関（ $p<0.01$ ）が、【キャリア向上への関心】は「受け持ち患者の個別性に看護を行えている」の相関（ $P<0.01$ ）が高かった。

「回リハ看護師の役割に関する教育に満足している」では、「全く当てはまらない・少し当てはまる」は93.6%であり、「回リハ病棟は前勤務病棟に比べて看護師としてのやりがいを感じる」は、上記を選択した者は80.7%であった。

【考察】

回リハ看護師はやりがいを感じて看護できていないとともに、看護師が必要とする知識や技術の教育に満足していなかった。この結果は、役割を把握しないまま、専門性の高い多職種と関わることで、看護師としてのアイデンティティーが揺れていると考えた。日本医療労働組合連合会の労働実態調査と比較すると回リハの勤務者は5年未満の割合が多く、定着率が低いと考えられた。看護師のワークモチベーション尺度で「確実にリスクを回避すること」は先行研究と比較して回リハの方が高かった。患者が機能を回復していく過程で、転倒・転落が起こりやすい環境調整が必要な回リハ看護師の特徴と考えられた。

【チーム協調への関心】と「セラピストから移乗や経口摂取方法等日常生活に必要な技術を積極的に学んでいる」の相関が高いことは、専門職から知識・技術を積極的に学ぶこと姿勢が窺え、教育体制を整備することがやりがいに繋がると示唆された。

【結論】

- 1、回リハの看護師はやりがいを得られずに働いていることが多い。
- 2、教育体制を整備し、専門知識を高めて看護実践を行うことでやりがいを得られる。

【引用参考文献】

黒河内仙奈 『回復期リハビリテーション病棟に勤務する看護師の職務満足度を高める看護管理実践の検討』2013～2016、科学研究費助成事業 研究成果報告書（機関番号：12501、課題番号：25862140、研究者番号：40612198）